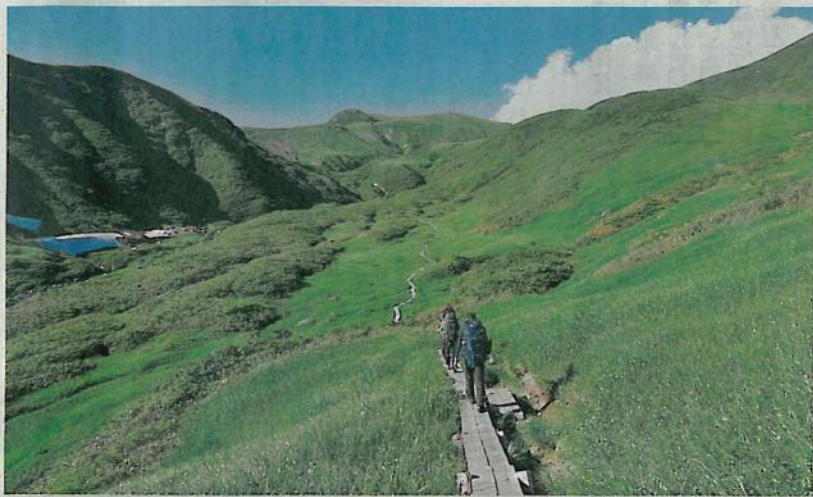




一行が宿泊した御浜小屋からは眼前に広がる日本海へと沈む夕日が見られた
＝遊佐町

一ノ滝 御浜小屋



草原の木道を進むメンバー。涼しい風が頬をなでる

本社登山隊ルポ

夏山踏破 鳥海

〈第2日〉

鳥海山踏破を目指す山形新聞の登山パーティーは30日、酒田市の鶴間池小屋から山の南西方向の裾野に移動。名瀑（めいばく）・二ノ滝など鳥海山の水景を求め、鳥海湖を望む御浜小屋まで山行を続けた。
＝1面に関連記事

一行は前後、鶴間池小屋に宿泊した。ブナの倒木で倒壊した山小屋を地元の八幡山岳会が2007年に建て替えた。午前4時半に起床すると、外は既に明け、朝日が壮麗な尾根筋を照らし始めていた。鶴間池の水面には山の姿が鮮やかに映し出され、静かな感動を覚えた。

一行は車で遊佐町の一ノ滝方面へ移動。そこから御浜小屋までは高低差約1300mの強行軍だ。初めに足を止めたのは一ノ滝。ごろりとした岩がいくつも転がるその先に、ごう音をたて激しいしぶきを上げる名瀑が姿を現した。近く、ミストシャワーが降りかかり、川水を両手ですくえばひんやり心地いい。

さらに歩を進めると巨岩が現れた。地底のエネルギーを放出し、鳥海山の山容を形づくった太古の火山活動の名残を今にとどめる。岩場がそのまま山道になったような道が続く、よじ登るようになって前に進む。峻険（しんげん）

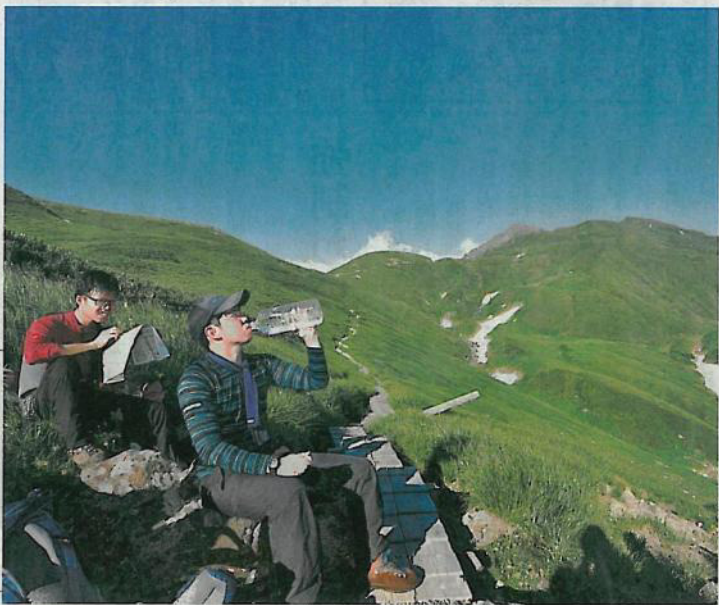
疲れ癒やす 水と夕景

ゆんげん）な道は永遠に続くように思われ、青空もこの日はかりはうらめしい。

幾多の山行を経験してきた山形大ワシターフォーゲル部の面々も疲弊の色を隠さない。浅野大樹さん（29）は同大学院1年、大滝涼さん（29）は同大4年。とも「景色を楽しむ余裕はなかった」と大粒の汗をぬぐった。月山沢の水辺で昼食として食べた即席めんじゆに疲れた体は癒やされ、パンツ一丁で飛び込んだ川水が体のほてりを取ってくれた。

草原が広がる千畳ヶ原を経て鳥海湖へ。おわんのような底にたたずむ湖面を左手に見ながら山道を歩く。岩場のような斜面を切り切り、ようやく御浜小屋へ。夕日がオレンジ色に輝き、外輪の肌や頂上の新山、行者岳を照らした。その光景は疲労を忘れるほど神々しかった。

（鳥海山登山企画取材班・木村敏郎、小林達也、齋藤健太）



鳥海湖へと続く登山道で水分を補給する隊員。山頂部がくっきりと確認できる